

大学生の愛情の枠組みと 自尊感情・対人信頼感との関係

桂 田 恵美子

問題と目的

人間は生まれてから養育者（多くの場合、母親）の世話を受け成長していく。そして、その養育の経験を通して、自分自身というものを理解し、人間に対する信頼感を形成していく。しかし、養育者や家族成員だけという人生初期の限られた人間関係も成長するにつれ、関係の輪は広がりを見せるようになる。特に、青年期後期にある大学生はそれまでに形成された家族関係、友人関係以外にも大学での新しい友人関係やアルバイトなどを通じた社会的なつながりなど様々な人間関係が形成されていく。

青年期の対人関係を語る際に、**Bowlby (1969)** の愛着理論の中の“**internal working model (IWM)**” の概念を用いて考えることができる。**Bowlby (1969, 1973, 1980)** は、**IWM** とは、その個人特有の対人関係を判断する枠組みであり、あらゆる対人関係での出来事を解釈し処理するのを手助けするものと定義している。この **IWM** は乳幼児期に形成された養育者との愛着が基礎になっている。乳幼児期において安定した愛着が形成されると、他者は信頼できる存在であり、自分も他者から援助的に答えてもらえる価値ある存在であるという認知的な枠組みとして内在化される。一旦この **IWM** が確立されると、このモデルは継続し無意識レベルで機能する (**Bowlby, 1988**)。そして、愛着対象者は変わることはあっても、乳幼児期の愛着の質は人生において大きな環境上の変化がない限り、青年期・成人期へと連続性があるとされている。

一方、Takahashi (1990) はソーシャルネットワーク理論に基づいて愛情の関係モデル (Affective Structure Model) を提唱し、青年期の対人関係を説明している。そのモデルによると、愛情の関係とは、人間関係の中心部分にあって、複数の重要な他者と結びつきたいという愛情の要求にもとづく人間関係のことである。愛情の要求は社会的な存在である人間が生存を確保するために生得的に備え持ち、生後間もなくから観察され、人間に普遍的に見られ、従来、信頼、愛着などとして扱ってきた、親しい他者とのポジティブな関係の多くを含む (高橋, 2007) としている。愛着関係が母子の二者関係を基礎としているのに対し、愛情の関係モデルは複数の親しい他者との関係が個人の対人関係の枠組みを作るという。また、従来の一方的視点のみではなく、“持ちつ持たれつ” といった双方向的視点が盛り込まれることで、青年期の対人関係の枠組みをより詳細に捉えようとしたものである (高橋, 2002) という。

高橋は、愛情の関係モデルに基づいて、複数の人々との双方向にポジティブな感情を交換しあう関係が形成されているのを測定するために Affective Relationships Scale (ARS ; Takahashi, 1990 ; Takahashi & Sakamoto, 2000) を開発した。ARS は、愛情の関係の枠組みを愛情の要求を向ける対象、愛情の要求が目的とする心理的機能、愛情の要求の強度の三つで測定する。そして、その測定値から相対的に愛情の要求がもっとも強く向けられた対象である“中核的な対象 (focal figure)” が決められる。ARS において、中核的な対象が母親の場合は母親型、恋人の場合は恋人型と分類される。既婚者の場合は配偶者や自分の子どもも中核的な対象として含まれる。しかし、中にはどの対象者にも愛情の要求が弱い人もおり、そのような人達は Lone-wolf 型と類型され、心理的に他者を必要としない人であるとされている。

高橋 (2007) によれば、中核的な対象となった人は、それが誰であっても、安全と安寧を保証する心理的機能を含む様々な機能を強く充たしているという。また、この中核的な対象が誰であるかによって愛情の関係の枠組みを類型化できるとしている。そして、この枠組みの類型は対人関係において過去の経験を思い出したり、将来の予想をしたりする時にフィルターとして働くとい

う。例えば、高齢者にライフストーリーを語ってもらうと、**Lone-wolf**型はすべての人物を否定的に描写し、他人を信じられないとか、他人に騙されるのを恐れて他人とあまり親しい関係を築こうとしないということが語られた。一方、配偶者型や友達型は人生に満足しており、他人を信頼していることが語られた (Takahashi, 2004)。また、小学生を対象とした研究では、**Lone-wolf**型の子どもは母親型や友達型に比べ、強い孤独感を示し、自尊感情や自己効力感が低いという結果を示した (井上・高橋, 2000)。

このような研究結果を見ると、この **ARS** で測定される愛情の枠組みは愛着理論の **IWM** と類似した概念であると考えられる。また、**ARS** で測定される中核的な対象は愛着理論での愛着対象として捉えることができると思われる。実際、高橋 (2007) も、愛情の関係モデルは従来の愛着関係をも含むものであると述べている。青年期の認知的発達や人間関係の多様性を考えると、母子の二者関係にとらわれるよりも、複数の親しい者との関係が対人関係の枠組みになるという愛情の関係モデルが青年期の対人関係を考える際には適切であると思われる。しかし、これまでの高橋らの研究で大学生を対象としたものでは、友達型の女子学生が家族型 (中核的对象者が母親・父親・兄弟姉妹など家族の者) の女子学生よりも新しい友達を作りやすく寮生活への移行がスムーズであったことを報告する研究 (Takahashi & Majima, 1994) はあるが、高齢者や小学生に見られた **IWM** をより明確に反映した概念との関連についての研究は見られない。

そこで、本研究では、高橋ら (2000) の **ARS** を用いて大学生の愛情の枠組みを測定し、それが **IWM** を反映しているのかどうかを検証する。つまり、前述した高橋ら的高齢者や小学生を対象とした研究結果が大学生の場合にも言えるのかどうかを確かめる。本研究では、**IWM** を反映したものとして、自分は価値ある存在であるという自己イメージと、他者は信頼するに値する存在であるという他者イメージを測定した。

方 法

1. 調査対象

本研究は関西の大学に通う学生を対象に、質問紙法により調査を実施した。172名に質問紙を配布し、有効回答数は165名（男性56名、女性109名）であった。年齢は18歳から26歳、平均年齢は20.5歳（SD=1.53）であった。調査時期は2006年10月であった。

2. 調査に用いた質問紙

以下の3つの尺度をひとつにまとめたものを配布し、回答を求めた。

①Affective Relationships Scale (ARS)

青年期における愛情の枠組みを判定するために、Takahashi (1990)、Takahashi & Sakamoto (2000) により作成されたARSを使用した。この尺度は愛情の要求を向ける対象となりうる、母親、父親、異性の友人、友人、尊敬する人物についてそれぞれ12項目ずつ（e.g., “〇〇が困っている時には助けてあげたい” “できることならいつも〇〇と一緒にいたい”）を5件法で測定する尺度である。また父母の有無、恋人の有無も回答してもらい、思い浮かべた友達が親友であるかどうか、尊敬する人物は具体的に自由記述の方法で回答してもらい、その人物について回答を得た。5件法で12項目の評定を単純加算し各々の対象者について求め、もっとも点数が高かった人を愛情の関心の枠組みとみなすことになっている。なお、どの対象者においても合計点が36点以下の場合にはLone-wolf型とし、最高得点が同得点で2人いた場合はTie-type、3人以上の場合をMultiple-typeとすることになっている。ARSには6種類の心理的機能（1. 近接を求める、2. 情緒的支えを求める、3. 行動や存在の保証を求める、4. 激励や援助を求める、5. 情報や経験を共有する、6. 養護する）が各2項目ずつ質問項目に組み込まれている。この尺度の本研究での信頼性はCronbachの α 係数が.96であり、高い信頼性が得られた。

②自尊感情尺度

個人の自己イメージを測定するために、本研究では、**Rosenberg** により作成された、自尊感情尺度の邦訳版（山本・松井・山成，1982）を使用した。自尊感情尺度は 10 項目（e.g., “少なくとも人並みには、価値のある人間である” “自分は全くだめな人間だと思うことがある（逆転項目）”）から成り，“あてはまる（5点）” から “あてはまらない（1点）” までの 5 件法で評定させるものであった。得点が高いほど、自尊感情が高いことを示し、ポジティブな自己イメージを持っているといえる。本研究での信頼性は **Cronbach** の α 係数が .84 であり、高い信頼性が得られた。

③対人信頼感尺度

個人の他者イメージを測定するために、本研究では、堀井・槌谷（1995）によって作成された、対人信頼感尺度を使用した。この尺度は特定の対象ではなく、人間一般に対する信頼感、すなわち個人の人間観を測定するものである。対人信頼感尺度は 17 項目（e.g., “人は、基本的に正直である” “人は、他人の権利を認めるよりも、自分の権利を主張する（逆転項目）”）から成り，“そう思う（5点）” から “そう思わない（1点）” までの 5 件法で評定させるものであった。得点が高いほど、対人信頼感が高く、他者に対してポジティブなイメージを持っていることを示す。本研究での信頼性は **Cronbach** の α 係数が .85 であり、高い信頼性が得られた。

結 果

1. 愛情の関係の枠組みの種類とその割合

ARS の総得点を基に、中核的な対象が誰であるのかによって個人を分類した。母親、父親が最高得点を示したものはまとめて両親型とし、複数の対象者が同点で最高得点となった **Tie-type** や **Multiple-Type** は、その他の型に分類した。その結果を **Table 1** に示した。

類型別の割合を見てみると、対象となった大学生は恋人型（37.0%）と友達

Table 1 類型の出現頻度

類型	男性	女性	合計	割合
Lone-wolf 型	5	1	6	3.6%
両親型	0	7	7	4.2%
恋人型	28	33	61	37.0%
友だち型	10	40	50	30.3%
尊敬型	5	13	18	10.9%
その他の型	8	15	23	13.9%
合計	56	109	165	100%

型（30.3%）に多く分類された。一方、Lone-wolf 型（3.6%）と両親型（4.2%）に分類された人は少なかった。また、Lone-wolf 型はほとんどが男性であり、両親型は全て女性であった。

2. 自尊感情と愛情の枠組みの類型との関連

個人の愛情の枠組みの型と自尊感情との関連性を検証するために、Table 1 に示した 6 類型を独立変数、自尊感情得点を従属変数とした分散分析を行ったところ、有意差が見られた ($F(5,164)=2.86, p<.05$)。多重比較をした結果、「Lone-wolf 型・尊敬型・友達型・その他の型・恋人型」は「両親型」より自尊感情得点が低いことが示された (Table 2 参照)。「両親型」が全て女性であったことから、自尊感情得点に男女差があるのかどうか t 検定をおこなったところ、有意な差は見られなかった。

次に、親が中核的な対象者となっているかどうかで違いがあるのかを見るために、Tie-type や Multiple-Type の中で母親あるいは父親が含まれている者

Table 2 6 類型別自尊感情得点の平均値（標準偏差値）と F 値

	Lone-wolf 型 (n=6)	両親型 (n=7)	恋人型 (n=61)	友だち型 (n=49)	尊敬型 (n=18)	その他の型 (n=23)	F 値
自尊感情 得点	28.00 (10.60)	39.14 (5.27)	31.11 (7.58)	28.84 (6.81)	28.78 (8.13)	29.61 (6.80)	2.87*

* $p<.05$

Table 3 3類型別自尊感情得点の平均値（標準偏差値）と F 値

	Lone-wolf 型 (n=6)	非家族型 (n=144)	家族型 (n=14)	F 値
自尊感情得点	28.00 (10.60)	29.91 (7.40)	34.07 (7.22)	2.23

は両親型に含め家族型とし、恋人型、友達型、尊敬型、Tie-type や Multiple-Type の中で母親あるいは父親が含まれていない者は非家族型とし、Lone-wolf 型はそのままという 3 類型による分散分析を行った。その結果、平均値では家族型が一番高く、Lone-wolf 型が一番低かったが、その差は有意ではなかった (Table 3 参照)。

3. 対人信頼感と愛情の枠組みの類型との関連

個人の愛情の枠組みの型と他者に対する信頼感との関連性を検証するために、Table 1 の 6 類型を独立変数、対人信頼感得点を従属変数とした分散分析を行ったところ、類型の主効果は有意ではなかった (Table 4 参照)。

次に、上述した 3 類型による分散分析を行った。その結果、有意差は認められなかった (Table 5 参照)。

Table 4 6 類型別対人信頼感得点の平均値（標準偏差値）と F 値

	Lone-wolf 型 (n=6)	両親型 (n=7)	恋人型 (n=59)	友だち型 (n=49)	尊敬型 (n=16)	その他の型 (n=22)	F 値
対人信頼感 得点	47.67 (15.49)	47.57 (3.60)	49.41 (8.93)	48.39 (11.37)	47.38 (11.45)	46.55 (7.81)	.32

Table 5 3 類型別対人信頼感得点の平均値（標準偏差値）と F 値

	Lone-wolf 型 (n=6)	非家族型 (n=140)	家族型 (n=14)	F 値
対人信頼感 得点	47.67 (15.49)	48.57 (10.07)	46.23 (3.68)	.34

考 察

本研究では、愛情の関係の枠組みが大学生においても IWM を反映したものであるのかどうかを確かめるために、個人の IWM を反映した自尊感情や対人信頼感との関連があるのかどうかを調査した。まず、愛情の関係の中で誰が中核的な対象となっているのかを検証したところ、恋人型と友達型の割合が大部分を占め、Lone-wolf 型と両親型は少なかった。この結果は、先行研究（高橋，2002）と同様、青年期になると親というよりも恋人や親しい友人に対して愛情の要求を強く向け、愛着対象が親から恋人や友人に変化することを示している。また、先行研究において高橋（2002）は、どの年齢群においても Lone-wolf 型は 3～10% 程度出現するとしているが、本研究においても Lone-wolf 型の割合は約 3% であり、その範囲の中に入っていた。

男女別で見ると、両親型には女性しか存在しないと言う結果であった。先行研究においても、両親型は中学生を除いて女性に多いとされており（Takahashi & Sakamoto, 2000）、本研究の結果は先行研究を支持するものである。この結果は、青年期の女性では愛情の要求が家族内に向けられている者もいるが、男性では家族内に向けられることがほとんどないことを示している。Family System Test を使って大学生が認知する家族の親密さを測定した研究においても、女性は男性よりも両親間の親密さや自分と父親との親密さを高く認知していることが示されている（中見・桂田，2008）ことから、青年期においては女性の方が家族志向であると言える。また、本研究においては Lone-wolf 型の大部分は男性であるという結果であった。これは、女性のアイデンティティが人との関係性で定義され、男性のアイデンティティは人から独立して自分自身を表現することと密接に関係している（Gilligan, 1982）というアイデンティティの発達の性差を反映したものであると考えられる。つまり、女性にとっては人と心理的なつながりをもつことは重要なことであり、そのため、愛着対象を必要としない Lone-wolf 型は極めて少なくなるのだと思われる。しか

し、先行研究では総得点において女性の方が男性よりも高いことは報告されている (Takahashi & Sakamoto, 2000) が、Lone-wolf 型の性差は言及されておらず、今後、研究の蓄積が必要である。

青年期の愛情の関係の枠組みと IWM の関係については、ポジティブな自己イメージである自尊感情においてのみ関連が見られた。愛情の関係モデルによると、愛情の要求が向かう中核的な対象が誰であれ、そうした人物を持っていると心理的適応には問題はなく、問題があるのはそうした人物を持たない Lone-wolf 型であるとしている (高橋, 2007)。実際、高齢者や小学生を対象とした先行研究 (井上・高橋, 2000 ; Takahashi, 2004) では、Lone-wolf 型とその他の型との間に他者信頼や自尊感情において差異が示されていた。しかし、本研究では、Lone-wolf 型と尊敬型、友達型、多対象型、恋人型には自尊感情において有意差はなく、差があったのは両親型であり、両親型の自尊感情は他よりも高かった。また、有意差には達しなかったが、親が愛着対象に含まれている場合は自尊感情得点が他の者よりも高かった。この結果は大学生においても親との関係は特別な意味をもつことを示唆している。横のつながり的要素が強い友人や恋人との対人関係はポジティブな側面ばかりではなく、ネガティブな側面も持つ。そうした人間関係においては、少なからず自己が傷つけられているかもしれない。つまり、恋人や友人はまだ、乳幼児期の *secure base* (Ainsworth et al. 1978) のような存在にはなっていないのかもしれない。一方、それまでの延長で親は *secure base* となっており、その結果、愛情の枠組みにおける中核的な対象が親である者はよりポジティブな自己イメージを持っているという結果になったと考えられる。

しかし、親が *secure base* になっているのであれば、他者イメージにおいてもまた、両親型が他の型よりもポジティブであることが予想されたが、そのような結果は得られなかった。ARS は“持ちつ持たれつ”といった双方向的視点が盛り込まれている (高橋, 2002) とされているので、ARS で測定された中核的な対象者は危険なときは守ってもらえる、安心が得られる存在である乳幼児期の愛着対象とは違ったものである可能性もある。そのため、愛着理論

で予測されたような完全な結果がでなかったのかもしれない。あるいはまた、本研究で使用した対人信頼感尺度に問題があるのかもしれない。この尺度は、どちらかと言うと、一般的な人間観としての対人信頼感の側面が強く、個人が比較的親しい関係にある他者を信頼しているかどうかということを正確に測定できていない可能性がある。つまり、対人関係をあまりにも拡大し過ぎたために、結果として表れなかったのかもしれない。今後、ARS と親しい関係における他者信頼感との関係を検討する必要があるだろう。

青年期においては、複数の人たちとの関係性が存在し、その関係性も一方向的ではなく双方向的であるとする考えに基づいて開発された ARS は有用な測度である。そして、ARS によって測定された対人関係の枠組みが個人の適応に影響するという考えは納得がいく。しかし、本研究でも明らかになったように、アイデンティの発達過程において関係性を重要視する女性とそうではない男性では、適応との関連では相違が出てくるものと思われる。つまり、女性の Lone-wolf 型は適応に問題があるが、男性の Lone-wolf 型は適応にそれほど問題があるとは言えないかもしれない。

一方、愛着には性差がないとされており、乳幼児期の安定した愛着から連続する IWM をもつことは良い適応につながる (Bowlby, 1988) とされている。本研究では、ARS で判定される愛情の枠組みは愛着理論における IWM に通じているという考えのもと、自尊感情や他者信頼感との関連を検討した。しかし、本研究の結果から、ARS で判定された中核的な対象が親以外である場合、愛着理論が提唱する secure base となる対象とは違った存在である、あるいは、secure base となる愛着対象にまだなっていない可能性が示唆された。今後、個人の発達を視野に入れ、ARS を用いた縦断研究が望まれる。

また、愛着理論によれば、青年期・成人期においても精神的に secure base となる対象を持っているか否かが個人の適応にかかわってくる。しかし、青年期・成人期においては、secure base となる対象が必ずしも人間とは限らないだろう。例えば、宗教なども含まれるかもしれない。そうした精神的な secure base を持っているかどうかを包括的に捉える測度の開発が望まれる。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S. (1989). Attachment beyond infancy. *American Psychologist*, 44, 709–716.
- Ainsworth, M. D. S., Belhar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss: Vol. 3. Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1988). *A secure base: Parent-child attachment and healthy human development*. New York: Basic Books.
- Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Massachusetts: Harvard University Press.
- 堀井俊章・植谷笑子 (1995). 最早期記憶と対人信頼感との関係について. 性格心理学研究, 3, 27–36.
- 井上まり子・高橋恵子 (2000). 小学生の対人関係の類型と心理的適応: PART による検討. 教育心理学研究, 48, 75–84.
- 中見仁美・桂田恵美子 (2008). 大学生における父親の認知と家族機能との関連. 家族心理学研究, 22, 42–51.
- Takahashi, K. (1990). Affective relationships and lifelong development. In P. B. Batltes, D. L. Featherman, & R. M. Lerner (Eds.), *Life-span development and behavior, Vol. 10*. (pp. 1–27). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Takahashi, K. (2004). Close relationships across the life span: Toward a theory of relationship types. In F. R. Lang, & K. L. Fingerman (Eds.). *Growing together: Personal relationships across the lifespan* (pp. 130–158). New York: Cambridge University Press.
- 高橋恵子 (2002). 生涯にわたる人間関係の測定: ARS と PART について. 聖心女子大学論叢, 98, 152–122
- 高橋恵子 (2007). 人間関係の生涯発達理論—愛情の関係モデル. マイケル・ルイス / 高橋恵子 (編), *愛着からソーシャルネットワークへ* (pp. 73–104). 東京: 新曜社.
- Takahashi, K. & Majima, N. (1994). Transition from home to college dormitory: The role of preestablished affective relationships in adjustment to a new life.

Journal of Research on Adolescence, 4, 367–384.

Takahashi, K. & Sakamoto, A. (2000). Assessing social relationships in adolescents and adults : Constructing and validating the Affective Relationships Scale. *International Journal of Behavioral Development*, 24, 451–463.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*, 30, 64–68.

付記：本研究は 2008 年度文学研究科博士課程前期課程修了の小迫拓実との共同研究である。

——文学部教授——